

【解答】

①・② 2点×10 ③・④〔問1〕～〔問4〕・⑤ 5点×14 ④〔問5〕 10点

① (1) し(いる) (2) ちえん (3) ふさ(いで) (4) とうとつ

(5) れいこう

② (1) 退(ける) (2) 救(われる) (3) 貯蔵 (4) 標準

(5) 快晴

③ 〔問1〕 エ 〔問2〕 ウ 〔問3〕 ア 〔問4〕 ウ

〔問5〕 イ

④ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 ア 〔問3〕 エ 〔問4〕 イ

〔問5〕 別ページの解答例参照

⑤ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 イ 〔問3〕 イ 〔問4〕 エ

〔問5〕 エ

【解説】

③〔問1〕直前の早苗さなえの言葉を聞いた登磨とうまは「憚はばられるなんて言葉、中学生が使う言葉なのだろうか」と心の中で思っている。およそ中学生に馴染なじみがあるとは思えない言葉を自然に使えるような見識をもつ早苗が、そこからは想像もできない愚かしい行動に走った(＝血迷った)ことが不可解で、登磨はその理由を知りたいと考えている。このあとの登磨の発言から、徐々に早苗の気持ちを引き出されてくることになる。

〔問2〕「入部したての頃は……試合でも負け」ていたが、「二年生になったら、少なくとも部員には負けなくなっ」たのはそれだけの努力を重ねたからであり、早苗にとっては誇らしいことであつたはずだ。しかし、途中入部の瑛太えいたに負けて調子を崩し、目標としていた最後の試合で補欠になってしまった早苗にしてみれば、「努力してきたことが、必ずしも報われる」わけではない

ことになり、「もうどうでもいい」と投げやりな気持ちになっているのである。そのため「他人事ひとごとのように淡々と」した口調になったのだ。

〔問3〕直前の「なのに数か月前に入つたばかりの……負けるなんて」には、それまでの早苗の「淡々と」した口調とは異なり、悔しさがにじみ出ている。そのやり場のない悔しさをかみしめる様子が、登磨の目に映つた傍線(3)の、強く握りしめた早苗の手の描写に表れている。「手の甲」の「蜘蛛くもの巣状に走る血管が透けて見え」るほどだという部分には比喩が用いられており、短い文はすべて登磨の見たままを描写した写実的な表現である。

〔問4〕少し前で登磨は「早苗ちゃんはテニス、楽しんでた？」と問いかけ、それに対して早苗は「最近じゃ、全然楽しくなくて、部活が憂鬱……嫌になつてしまったのかも」と答えている。勝っているうちは好きだったのが、瑛太に負けて試合に出られなくなって嫌いになつたという早苗のことを、登磨は傍線(4)で「勝ち負けって影響力すごいね」と皮肉をこめて言っている。登磨は、勝つことだけに価値があると考えたために早苗が今回のような間違つた行為に及んだのだと考えており、その愚かさ気づいてほしくて、傍線(4)のような言い方で伝えているのである。

〔問5〕少し前で、登磨は「挫折さつせつなんてしたことないですよ」と早苗から問いかけられ、「(料理を)休んでたことはあつたけど、負けたことはない」「だってオレ、誰かと競つたことがないから」と答えている。この言葉を聞いて早苗は、競つて勝つことに価値があるとしてきた自身のテニスへの考えとは別の考え方を示されたようで、胸を突かれたのである。

④〔問1〕傍線(1)の主張について、次の第五段で補足している。「異質なものをみると驚」くのは「自然な反応」だが、「今の日本人はネガティブにとらえて拒否する傾向が強い」とある。「異質なものをこばみ、平均をよしとする圧力の強い日本の社会」においては、「異質なものを直ちに「拒否」する傾向にあるため、それはよくないことであると自らがきちんと認識し、そうならないよう注意する必要がある」と述べているのである。

第1回(9月)
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「身体を使うこと」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。
- 作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)
- ① 字数：百四十一字以上は減点なし。百四十文字～百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上のものには得点を与えない。

段落の頭は一字空ける。
必ず守ること！

①	小	学	校	時	代	か	ら	の	自	分	を	ふ	り	返	っ	て	み	る	と、
	身	体	を	使	う	こ	と	が	ず	い	ぶ	ん	減	っ	て	き	た	と	感
	る	。	②	ス	マ	ホ	を	持	っ	前	は	、	調	べ	学	習	な	ど	で
	館	に	行	き	、	本	を	探	し	、	書	き	写	し	て	い	た	。	③
	そ	れ	が	ス	マ	ホ	で	一	度	に	で	き	て	し	ま	う	。		
	④	実	際	に	身	体	を	使	っ	て	や	っ	た	こ	と	は	そ	の	分
	分	の	も	の	に	な	る	よ	う	に	思	う	。	⑤	ま	た	、	身	体
	能	の	点	で	も	、	指	を	動	か	す	だ	け	よ	り	ず	っ	と	多
	の	部	分	を	使	っ	て	い	る	。	⑥	「	便	利	」	よ	り	も	「
	を	動	か	す	こ	と	」	を	大	切	に	し	て	い	き	た	い	。	

こういう場合、
「や。や」は
改行せず、
行の末尾に入れる。

② 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〈内容〉…「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

③ 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

〈内容〉…本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)

〈表記〉…句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)

〈言葉の特徴やきまり〉…不適切な箇所が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞↓意見」の形か、「意見↓体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験・見聞↓意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験・見聞」を簡潔に書く(①)③。そして、その「体験・見聞」についての「意見」を書く(④)⑥。右の作文のように、「便利」よりも「身体を動かすこと」を大切にしていきたい」という意見につながる体験・見聞を述べると、筋の通った文になる。「意見↓体験・見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験・見聞」を具体的に述べる。

解答

①・② 2点×10 ③・④〔問1〕～〔問4〕・⑤ 5点×14 ④〔問5〕 10点

① (1) あいしゅう (2) じょうほ (3) さと(した) (4) ひへい

(5) たずさ(わる)

② (1) 厳(しい) (2) 批評 (3) 険(しい) (4) 賛否 (5) 熱湯

③ 〔問1〕 エ 〔問2〕 ア 〔問3〕 イ 〔問4〕 ウ

〔問5〕 エ

④ 〔問1〕 ア 〔問2〕 エ 〔問3〕 イ 〔問4〕 ウ

〔問5〕 別ページの解答例参照

⑤ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 ア 〔問3〕 エ 〔問4〕 ウ

〔問5〕 イ

解説

③〔問1〕 部屋が空いているかどうかについて職員とやりとりをしているとき、心の中で結は、「いおじ、を五時と、あなたはとったのですよね……あなた
のミスだ……間違えたのはあなただ」と口には出せない指摘を繰り返してい
る。さらに、部屋が空いていることを知ったため、空いているにもかかわら
ず貸そうとしない職員の態度に対する怒りを感じつつ、傍線(1)のような言葉
を投げかけているのである。

〔問2〕 不快なやりとりを職員と交わしたあとの三人の様子に着目する。「大船
さんは……剣道で面を打つように……ふりおろした」、「若田さんは……背負
い投げをするようにした」、「わたしも……アッカンベーをした」と、三者三
様の動きを見せている。わざわざ「受付をふり返って」からの行動であり、
相手が見ていないことを知りつつも、職員に対して本当はやりたかったこと
を動作に表せたので、傍線(2)のように多少気が晴れて笑うことができたのだ。

〔問3〕 傍線(3)の「結ちゃん……気にする必要なないぞ」という部分は、
大船さんの背中をたく動作にこめられた気持ちを「わたし」なりに解釈し
て言葉にしたものだ。これは同時に自身へと言い聞かせるものとなり、それ
に伴って心が静まっていく様子が、あとの「ふう。わたしの中を流れていた
どくどくした気持ちが……落ちていった」という部分に示される。こみあげ
ていた不快感が和らぐ様子が印象的に表されている。

〔問4〕 直後に「逃げた思いが抜けない……何度もママのことを考えた」と
ある。公民館での出来事を聞いてから怒るママが「結はそれでいいの？」と
問い続け、「わたし」は、「いいってば」と「逃げるように」答えている。あ
とで「ママが腹を立てたのは……わたしのためだ」と思い至っているが、マ
マが怒っているときには公民館での出来事をきちんと振り返らず、当然ママ
が感情的になる理由もわかっていない。ママとの会話について「トゲのよう
に引かなかったまま抜けない」思いがあるため、寝られなかったのである。

〔問5〕 職員とのやりとりについて振り返った「わたし」は、「いってやればよ
かった。わたしは片耳が聞こえませんって。なんでいえなかったんだろう」と
考えている。大船さんや若田さんと一緒に行動する中、自分が「両耳が聞
こえますって顔」をしていたことについて悔やんでいるのであり、片耳が聞
こえないことを受け入れきれない「わたし」の苦悩が傍線(5)を含む段落
全体から読み取れる。

④〔問1〕「貧困ループから抜け出す」のが難しい中で出る『自己責任』論
の具体例を、第三段で示している。その状況について第四段で疑問を投げか
け、第五段から第七段でより詳しく「貧困ループ」の実情を示しながら、
「一方的に責められるものでしょうか」「本人の努力不足ゆえでしょうか」
「本人の自覚が足りなかったからでしょうか」と改めて疑問を投げかけてい
る。第八段では、それまで投げかけた疑問の答えをまとめるかのように、
「あらゆる環境が……人生の選択に影響を与えて」と述べて、『自己責任』
の一言で片づけるのは、想像力の欠如以外の何ものでもない」と、自身の考

えを明らかにしている。第十四段で「『自己責任論』を……考え直す時期に
来ているのではないだろうか」と促すきっかけの段落となっている。

〔問2〕「大学に進学して成功している。その裏には……親がいたからです」と
いう部分について、筆者は傍線(1)でさらに詳しく説明している。路上生活者
は「自分の努力が足りない」という認識に対して、大学に進学して成功して
いる人はそもそも家庭環境に恵まれていたのであり、努力以前の前提が異な
ると述べているのである。

〔問3〕第十五段から、筆者が「パラサイト・シングル」という言葉を提示し
た事実と、その経緯として、「親同居の独身者が増加していた背景」を説明
している。傍線(2)の直後からは、親の態度が変化していく背景として、「子
どもの数自体が……格段に少なく」なったことにより、「我が子が成長して
なお親元に住み続けることは可能」になったと述べている。そのような「パ
ラサイト・シングル」が生まれやすい状況について、「これまで通りにあれ
これ世話することができる喜びに通じるのかもしれませんが」と、親が肯定的
に受け入れていると推測しているのだ。

〔問4〕筆者は「パラサイト・シングル」という存在が増えた流れを説明して
きたが、傍線(3)で「『住宅すぐろく』ゲームが機能していた」という、「パラ
サイト・シングル」が可能になる条件を示す。あとで「その事情も明らかに
変化」して「パラサイト・シングル」が続かなくなること述べるにあたり、
前提となっていた条件が機能していないという状況を強調しているのである。

〔問5〕別ページの解答例参照。

〔問1〕文章中では前書が二つ引用されている。「望湖水惜春」については、
傍線(1)の前の段落で示した解釈で「いちおう問題ない」ことを述べている。
また、「志賀辛崎に……」の前書については、「琵琶湖に舟を漕ぎだして……
楽しんだという情景が、いっそうはつきりうかび上がって」くること、「舟
遊びを現地の人びととともにいたという臨場感」がきわだつことを述べてい
る。俳句には示されていなかった詳しい地名や状況が前書に示されているた

め、様子をつかみやすいと考えているのだ。

〔問2〕それまで句の解釈を述べてきたが、傍線(2)のあとから「俳句の表現」
として、切字がないという点に着目した説明になっている。最後の段落で、
「あえて切字をはずした要因」として、筆者の考える芭蕉の真意を述べるた
めに、表現へと視点を移しているのである。

〔問3〕筆者の考える芭蕉の真意は、最後の段落に述べられている。「春の名残
をおしむ気持ち、親交をかさねた近江の仲間との友愛のころ、こうしたい
つまでも永久につづいてほしい心情を……断絶してしまいたくない」という
考えが、切字がないことから読み取れるということだ。

〔問4〕現代語訳に着目する。傍線(4)について、「琵琶湖の水辺が……惜春の情
にふさわしい」という去来の発言を肯定し、「古人もこの国で春を惜しむの
は……都にもおとらない」と芭蕉が答えている。「山水の景趣は人を感動さ
せるもの」であり、近江はそうのように感じられる土地だととらえているのだ。

〔問5〕「を」は、現代仮名遣いでは助詞の「を」以外には使われず、「お」を
使うので、イは「おさおさ」と表記する。「をさをさ」はあとに否定の語を
伴って「まったく」「ほとんど」という意味を表す。

漢字書き取りのポイント

(1) 厳 父 明らかに折れている

(2) 批 比 比 比 左右逆 同じ形 同じ形

(3) 険 更

(4) 賛 見

(5) 熱 湯 レ はね方

はねあり ×

第2回(10月)
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「社会における自己責任論」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

- ① 字数：百四十一字以上は減点なし。百四十文字～百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上のものには得点を与えない。

段落の頭は一字空ける。

必ず守ること！

①	食事を宅配するアルバイトで生活している	20
人たちの特集番組を見ました。②	生活の大変さ	
について自己責任と言われるそうですが、その	のアルバイトに至った事情は様々で、自己責	
任の一言で済ませるのは厳しいと感じました。	任	100
③	生活に苦しむ人が増えている状況の中、自	
己責任という言葉はあまりにも無神経だと思	己	
います。④	誰が貧困に陥っても不思議ではあり	
⑤	突き放すのではなく、貧困という根	
本的な問題を共に考えていくべきです。	本	200

こういう場合、
「や。や」は
改行せず、
行の末尾に入れる。

② 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〈内容〉：「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

③ 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

〈内容〉：本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)
〈表記〉：句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)
〈言葉の特徴やきまり〉：不適切な箇所が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件のときは、「体験や見聞↓意見」の形か、「意見↓体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)

〈書き出しを決める〉

「体験や見聞↓意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験や見聞」を簡潔に書く(①・②)。そして、その「体験や見聞」についての「意見」を書く(③・⑤)。右の作文では、番組を見た体験をふまえ、「自己責任」という言葉で突き放す姿勢に異を唱えているが、このように自分の意見につなげることを意識して体験や見聞を述べると、筋道の通った文になる。「意見↓体験や見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験や見聞」を述べる。

解答

- ①・② 2点×10

③・④〔問1〕～〔問4〕・⑤ 5点×14

④〔問5〕 10点
- ① (1) せま(る) (2) せいち (3) つ(きて) (4) だっこく (5) へいおん
- ② (1) 盛(り) (2) 荷 (3) 故障 (4) 祝福 (5) 根幹
- ③ 〔問1〕ウ 〔問2〕ア 〔問3〕エ 〔問4〕イ 〔問5〕イ
- ④ 〔問1〕エ 〔問2〕ア 〔問3〕エ 〔問4〕ウ 〔問5〕別ページの解答例参照
- ⑤ 〔問1〕エ 〔問2〕エ 〔問3〕ウ 〔問4〕ア 〔問5〕イ

解説

③〔問1〕直前に「西尾さんが……手にとる骨壺は、どれもわたしが手がけたものではなかった」とあり、後に「慣れているはずだと自分に言い聞かせるたび、**肋骨を針で突かれるような痛みを覚える**」とある。兄のほうが客の心を引きつける作品を作っていることは理解しているのだが、自分の手がけた作品が選ばれないことにやりきれなさを感じているのである。

〔問2〕第一文は、ガラスの骨壺が西尾さんの手で包み込まれている感じから、器そのものの繊細さを感じさせる表現になっている。第二文は「青」「白」というガラスの透明感を生かす色が「空」と「波打ち際」のようだという比喩を交え、その模様を鮮やかに浮き出させる表現になっている。後の「技術の差以上のもの」とは、その模様を生み出す感性であることも想像できる。

〔問3〕「道の言動をむやみに否定してはいけない」という母からの注意を理解しながらも、兄のあまりのひどい状態に耐えられず、「西尾さんの存在を完

全に忘れてしまつて」いるのである。兄の髪や服の汚れの詳しい描写や、そのままの格好で「店に入ってこようとすする」兄に叫んで制止しているところから、「わたし」が兄の行動に強い拒絶反応を示していることがうかがえる。

〔問4〕直後に「道はこんなふうになんか平気でお客さんに気を遣わせる」とあることから、西尾さんが自分の目の前で怒鳴られている道の心中を思いやり、骨壺についての感想を口にする事で、少しでも気持ちをやわらげてやろうとしていることがわかる。

〔問5〕羽衣子の話す道の失敗談に関心を示す様子もなく、ドアをじつと見ながら「骨壺は、あの人につくってほしいです」と発言していることから、西尾さんが「笑わなかった」理由を読み取る。西尾さんは自身の問いかけに対する道の言動に触れて、その作品に映し出された道の人となりにも引かれ始めていることが読み取れる。その人を引きつける何ものかを、本文最後の段落で「目に見えないしるし」と表現していることを押さえる。

④〔問1〕後に「強い淘汰圧のもとでは（生きるために不利な変化をもたらす）変異遺伝子は確実に排除」されるとある。つまり、厳しい環境条件のもとでは、「突然変異で現れた変異遺伝子がすべて排除され」、「純粋な種の性質」が保たれるわけである。シーラカンスがその例として挙げられている。

〔問2〕第二段に「遺伝子にとっては強い個体が必ずしも有利だ」とはいえないとあり、第三段で「違う生き方を身につけることによって、他の種との競合を避けて生き残るという方策」もあることをコウモリの例で説明している。つまり、同じ条件で「生存競争」をすることだけが生き残る方法ではないということである。

〔問3〕同じ段落に、ネコを例として、「なぜネコの爪が曲がっているのか」を問うことから「ネズミを捕食する生き方を続けるうちに、爪の形態がネズミを捕るのに適した形に進化した」という答えが進化生物学的に導き出されてくるとある。つまり、ある生物の性質がなぜそうなっているのかを問うことが、その性質の究明の出発点になるわけである。

〔問4〕 第五段では、生物の性質を理解する上で「なぜか」という問いが大切であることを述べている。「ただし」以下の第六段、第七段は第五段の補足であることに注意する。第八段では生物の「性質」から「行動」に視点を移し、その点でも「なぜか」を問うことが重要である点に言及して論をより深めている。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

〔5〕〔問1〕 ア・イ・ウは、活用があり、終止形が「だ」で終わる形容動詞で、いずれも「――な」という連体形がある。エは、活用がないので「特な」という形にはならず、用言（ここでは動詞）を修飾する副詞である。

〔問2〕 歴史的仮名遣いでは、語頭（単語の最初の音）以外の「はひふへほ」は「ワイウエオ」と発音する。「たとへば」「いふ」「かへる」がそれに当たる。「はべる」の「は」は語頭にあるので、これらの例に該当しない。

〔問3〕 Bの俳句のあとの二つ目の段落に「『山里は万歳遅し』という『行き』に対して」とある。その内容は最後から三つ目の段落に「世間から忘れ去られてしまったようなのかな静けさがまず感じられる」と書かれている。

〔問4〕 最後から三つ目の段落に「世間から忘れ去られたまま動きをとめてしまった山里という印象」が、「さまざまな生命の息吹きを感じ取れ」、「人間の生活の営みまでもが感じ取れ」て「山里が生きたもの」へと変わっていくと書かれている。

〔問5〕 ア・ウ・エの句は、方向性の異なる二つの言葉を取り合わせたものではなく、心情にせよ情景にせよ一つの方方向性で詠まれた句である。イだけが、音もなく静かに散る山吹の花と、対照的に激しく流れ落ちる滝の音とを取り合わせている。

漢字書き取りのポイント

(1) 盛

× 点のエリアの延長線上にない

× 四 閉じ

(2) 荷

(3) 故障

× 父 明らかに折れている

× 阝

(4) 祝福

× 艮・艮 形

× 八 形

× 兀 はね方

× 千

(5) 根幹

× 艮・艮 形

× 千

× 根 形

× 干 形

第3回(11月)
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「他人と競う生き方と、他人と違う道を模索する生き方」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。
- 作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)
- ① 字数：百四十一字以上は減点なし。百四十字～百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上のものには得点を与えない。

② 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〈内容〉：「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

③ 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

〈内容〉：本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)

〈表記〉：句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)

〈言葉の特徴やきまり〉：不適切な箇所が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)

段落の頭は一字空ける。必ず守ること！

も	が	思	分	し	③	か	き	普	②	①
積	、	う	野	、	成	ら	物	通	普	私
極	兄	。④	を	一	績	の	好	科	通	の
的	の	私	選	喜	だ	時	き	で	科	兄
な	よ	自	ん	一	け	代	な	大	で	は
も	う	身	で	憂	を	に	自	学	学	中
の	な	は	じ	す	基	も	分	に	卒	学
の	考	普	っ	る	準	向	に	向	業	卒
の	え	通	く	の	に	い	合	け	後	業
よ	方	科	り	で	し	て	っ	て	、	後
う	、	の	学	は	て	合	た	受	農	、
に	生	高	ぶ	な	格	格	分	験	業	農
思	き	校	の	く	の	と	野	勉	高	業
え	方	を	は	、	可	考	が	強	校	高
る	は	目	い	自	能	え	い	す	に	校
。	む	指	い	分	性	た	い	る	進	に
	し	し	こ	の	を	そ	し	よ	学	進
	ろ	て	と	好	模	う	、	り	し	学
	と	い	だ	き	索	だ	こ	、	た	し
	て	る	と	な		。	れ	生	た	。
200					100					20

こういう場合、
「や。や」は
改行せず、
行の末尾に入れる。

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞↓意見」の形か、「意見↓体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験・見聞↓意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験・見聞」を簡潔に書く(①・②)。そして、その「体験・見聞」についての「意見」を書く(③・④)。右の作文のように、「自分の好きな分野を選んでじっくり学ぶのはいい」「人と違う生き方は」むしろとても積極的なもの」という意見につながる体験・見聞を述べると、筋の通った文になる。「意見↓体験・見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験・見聞」を具体的に述べる。

解答

①・② 2点×10 ③・④〔問1〕～〔問4〕・⑤ 5点×14 ④〔問5〕 10点

① (1) そえん (2) ひた(つて) (3) しゅう (4) まかな(う)

(5) たんれん

② (1) 仏閣 (2) 基(づいて) (3) 武将 (4) 激(しい)

(5) 臓器

③ 〔問1〕 イ 〔問2〕 エ 〔問3〕 ア 〔問4〕 エ

〔問5〕 ウ

④ 〔問1〕 エ 〔問2〕 ア 〔問3〕 イ 〔問4〕 ウ

〔問5〕 別ページの解答例参照

⑤ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 エ 〔問3〕 ア 〔問4〕 エ

〔問5〕 イ

解説

③〔問1〕 前書きにもあるように、千鶴と隆司の夫婦は健太郎を養子にほしいと話し、義治は怒っている。その一件について、夫婦が謝る場面である。

「両ひざに手をついて、『おにいさん、すみませんでした』と頭を下げ」ていて、千鶴が心から謝罪をしていることが読み取れる。それに対して、この時点では健太郎と二人で暮らしていくことに迷いがある義治は、「冷静になってみれば、君たちの考えもわかる……僕の考えが、ある種の感情論に過ぎない」と、自分にも落ち度があるかのように話す。そんな態度に恐縮して傍線(1)のように言っているのである。

〔問2〕 自分たちの行動を謝罪した千鶴と隆司に対し、母親がいない状態よりも弟夫婦に預けるほうがいいかもしれないという思いもある義治は、「健太郎のことは、もう一度よく考えてみる」と話を保留しようとする。謝罪をし

た夫婦としてはもうその話を忘れてほしいと言うが、義治はその気持ちを受け入れたうえで、結論を出さないままこの日の話を終えようとしたのだ。

〔問3〕 義治は、「健太郎にとっては、真知子と義治の三人で暮らしてゆくことが、おそらく一番いいことであつたはず」だと考えている。母を亡くした健太郎の今後を思い、「一番いい環境」で育つことができないという悲観的な思いにとらわれてしまつて、やりきれなさを感じているのだ。そのため、しばらく眠ることができず、「涙が出てきて」いるのである。

〔問4〕 真知子は自分がいなくなることを前提に、義治を支えるように健太郎に頼んでいる。真知子がそこまで気をまわしていたことを知つて義治は改めてその存在の大きさを認識しているのである。その思いが、「どうして君は……どうして……」と、真知子のすごさについて心の中で呼びかける形での賞賛を並べていくことで、印象的に表現されている。

〔問5〕 それまで義治は、健太郎と二人で暮らすべきか迷い、「健太郎は……一番いい環境で育つてゆくことはできない」と嘆いて涙を流していた。それでも、「力を合わせて頑張ろうね……僕がついているから」と話す健太郎の強さを感じたり、健太郎の心のケアをしていた真知子の家族愛を感じたりしたことであふきれている。「もう義治の心に迷いはなかった」「迷うことなんて、初めからなかったのだ」とあるように、健太郎と二人で暮らす決意をできていなかったこれまでの自分と決別するために傍線(5)のように自分自身を奮い立たせているのである。

④〔問1〕 第五段までで話題にしている「彼」は、第二段の「お金が大好きで、お金を儲けることにしか興味が無く……相手を押しのけてでも自分を主張する」人のこと。これに対して筆者は否定的な見方を示しつつ、「彼だけが病んでいて私は健康であると言える権利を私は持っていない」、「彼のほうが健康で、病んでいるのは私のほうだということもありうる」と述べている。筆者の主観で「病」であるかどうか決まるわけではなく、金銭に執着することが一般的であるのならばそれを「病」とは言えず、むしろそれを否定的に見

る筆者のほうが「病」とされる場合もあるというのだ。

〔問2〕 第五段まででは「お金が大好きで……自分を主張する」人についての筆者の考えが示され、「彼が病んでいると考えることは、私の自由とは言えない」と述べている。それを受けた第六段では、「病というものに対する耐性を身につける……効用といったものを見つけ出すこと」が大切だと述べ、「双方に……節度……全体として……少しずつの前進」と、求められることを説明している。これらの考えは、第七段以降で述べる会社の「病的な性格」について考えるにあたって認識しておくことである。

〔問3〕 筆者は「不思議なのは、誰も、この法人というものの病的な性格に関して、根本的な疑いをさしはさむことがない」と述べている。「実は先天的に病んで」いて、「人間を裏切る存在」であるのに、ひとが会社というものを信じている現状について疑問視しているのである。

〔問4〕 筆者は、「どこまでも貪欲で……自信に満ちた自己を演出できるような会社」が投資家にとって魅力的なのではないかと述べている。第五段までに述べてきたように、人間であれば「避けて通りたい」と思うような強欲さを会社に求めているのであり、「お金に執着心が無く……人には優しく、いつも控え目でありのままの現実を受け入れる」ような性質は「法人という法律上に定められた人格」に対して求めているのだ。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

〔問1〕 傍線(1)については、対談の後半で詳しく説明している。「この一聯はすごい」という言葉に始まり、「満点の星とか平野の広がりとか、月さえも湧かせるような大きな流れ……地球規模で川というものをとらえている」と中西さんは述べ、そのような規模の大きさを、石川さんは杜甫の「持ち味」だと返す。さらに、「実景ではない」ことを指摘し、「李白の若いときの作品……それが頭にほっと浮かんで、この対句を作ったと思う」と説明している。

〔問2〕 「実景があまり鮮烈にイメージとして表れてこない」詩の中で、景色が

描かれている部分を取り上げつつ、「観念的なところが多い」と述べている。「景色を描きながら……字を出すことによって一つの心理を描こう」という狙いがある」と説明し、杜甫が「ことばの使い方の方に重点」を置いていることを指摘しているのだ。

〔問3〕 ここでの「練られて」は、よりよいものにするために内容を検討されたり手を加えたりされているということなので、「れ」は受け身の用法になる。

〔問4〕 中西さんの「地球規模で川というものをとらえている」という発言を受け、傍線(4)での石川さんは、ほかの詩を挙げて「これもやっぱり地球規模かな……天地、あらゆるものという意味で、ものすごいスケールの大きさ」と話している。中西さんの言うように規模の大きさを感じさせるものを示し、「規模の大きさ」が杜甫の持ち味であることを裏付けているのである。

〔問5〕 「皮切り」は、物事のし始め。「詩人としての杜甫の完成、その最初が『旅夜書懷』にある」という意味になる。

漢字書き取りのポイント

(1) 仏閣

× 基 はっきり閉じている

(2) 基

× 士

(3) 武将

× 点 が のエリアの延長線上にない

× 左から右

× 反転

(4) 激

× 矢 明らかに折れている

(5) 臓器

× 点 が のエリアの延長線上にない

× 器

× 臓 「サ」と「月」のバランス

第4回(12月)
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「会社の性格」というテーマで自分の意見を発表するの
にふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
 - (2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら
自分の意見をまとめる。
- 作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)
- ① 字数：百四十一字以上は減点なし。百四十文字～百一字は2点減点。百字以下また
は二百一字以上のものには得点を与えない。

段落の頭は一字空ける。

必ず守ること！

①	好	き	な	ス	ポ	ー	ツ	チ	ー	ム	を	経	営	す	る	企	業	が	変		
	わ	り	ま	し	た	。	②	街	と	一	体	と	な	っ	て	盛	り	上	げ	て	い
	て	、	応	援	に	行	く	と	以	前	よ	り	フ	ア	ン	に	愛	さ	れ	て	
	い	る	と	感	じ	ま	す	。	③	フ	ア	ン	と	し	て	グ	ッ	ズ	な	ど	の
	売	り	上	げ	に	貢	献	し	た	い	思	い	も	強	く	な	り	ま	し	た	。
④	会	社	が	利	益	を	求	め	る	の	は	当	然	で	す	が	、	そ	の		
	中	で	人	々	が	望	む	も	の	に	目	を	向	け	る	こ	と	が	で	き	
	て	い	れ	ば	、	社	会	も	悪	い	印	象	は	持	た	な	い	と	思	い	
	ま	す	。	⑤	金	銭	に	と	ら	わ	れ	る	性	格	で	あ	り	つ	つ	、	社
	会	を	よ	り	よ	く	す	る	存	在	で	あ	っ	て	ほ	し	い	で	す	。	

200

100

20

こうした場合、
「や・や」は
改行せず、
行の末尾に入れる。

② 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〔内容〕…「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)
／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

③ 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

- 〔内容〕…本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)
- 〔表記〕…句読点の誤り・誤字・脱字・えんじ 衍字が一つある。(1点減点)二つ以上ある。
(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)
- 〔言葉の特徴やきまり〕…不適切な箇所が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞↓意見」の形か、「意見↓体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)

いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験や見聞↓意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験や見聞」を簡潔に書く(①)③。そして、その「体験や見聞」についての「意見」を書く(④・⑤)。右の作文のように、「社会をよりよくする存在であってほしい」という考えにつながるような、会社に関する体験や見聞を述べると、筋道の通った文章になる。「意見↓体験や見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験や見聞」を述べる。

解答

①・② 2点×10 ③・④[問1]・[問4]・⑤ 5点×14 ④[問5] 10点

① (1) きも (2) ふく(らむ) (3) かんきゅう (4) しゅび

(5) さいばい

② (1) 射(る) (2) 鉄棒 (3) 織(る) (4) 比率 (5) 演劇

③ [問1] エ [問2] ウ [問3] イ [問4] エ

[問5] イ

④ [問1] ア [問2] エ [問3] ウ [問4] イ

[問5] 別ページの解答例参照

⑤ [問1] ウ [問2] 人も [問3] エ [問4] ア

[問5] あやしき

解説

③ [問1] 「記者はいますぐ走り書きができるようにペンを構えて」いた。そ

れにもかかわらず、「私」の答えを書きとめなかったのは、その答えが記者の期待していたものと異なっていたからである。記者は、「私」から被災地を応援するメッセージが聞けると期待していたのに、「申し訳ない」「^{きずな}絆なんて……言えない」などという消極的な答えが返ってきたのでとまどい、何とかして前向きなメッセージを引き出そうと考えを巡らせているのである。

[問2] 「私」が「滝の絵に没頭した」理由は、「ニセアカシアの絵のことを考えるとからだも頭も重くなるから」と書かれている。「私」は、新聞社の取材を受けたとき、絵の構図や光の線など技術的な工夫に着目してもらえず、被災地へのメッセージとしてだけ評価されることにわだかまりを覚え、絵を描いたことを悔いる気持ちにさえなっていた。「新聞見たよ」と聞かされるとそのときのことが思い起こされて気分が鬱屈するので、「心につかえる黒

い^{もや}靄をすべて押し流すように、真っ白な光を、水を、描き足した」のである。

[問3] 「私」は、最優秀賞を受賞した絵について、「あまりにも作画的で、写实的とはいにくいモチーフ」であり、「色使いも、陰影と角材の黒の塗り分けが曖昧で、朝露の水滴の光り方もかなり不自然」と感じている。どす黒いがれきの下に芽吹く双葉というモチーフは震災からの復興を意識したわざとらしさが感じられるうえ、技術的に稚拙さが目立つと感じたので、とても最優秀賞にふさわしい絵だとは思えなかったのである。

[問4] 「私」は「今このご時世で……ちよっときつすぎる」という^{さかき}榊の言葉を「何度も頭の中で繰り返した」あと、「だから私の滝の絵は賞を獲れなかったってことね」と思い至っている。この間の「何度も足をあげ、……音がした」という描写は、「私」が自分の絵が賞を獲れなかった理由について考え続けていることを表し、足の動きやそれに伴って鳴る音の反復によって、「私」の怒りが次第に募っていく様子を印象的に伝えている。

[問5] 「私」は、最優秀賞の授賞式の審査員の様子を見て、「ああ。やっぱり絵じゃないんだ。」と思っている。「やっぱり」は、「ニセアカシアの絵」のエピソードを踏まえた言葉であり、同じ経験をしたこと強調している。「絵じゃない」ところの評価だとわかってても、「どうして……本当はまだ納得がいかな」いと不条理を感じている。そして、そのあとに榊の「今このご時世で……ちよっときつすぎる」という言葉を聞いた「私」の「あーあ、そういうことだった……鳥や、花や、空を、描けば」という口調はまるで吐き捨てるかのようであり、怒りを読み取ることができる。題材によって評価されなかった可能性に気づき、自暴自棄になり絵を蹴飛ばそうとしたが、蹴ることはできなかった。この滝の絵は「私」が全力で描きあげたものであり、自身「いい絵だ」と思っていたからである。「私は私の滝を抱きしめていた」という表現に、ひたむきに絵と向き合った自分自身を肯定する気持ちや、全力で描きあげた絵をいとおしむ気持ちが読み取れる。

④ [問1] 傍線(1)のあとに筆者は、「近代・現代的な連帯」は「人と人の連帯

だけを課題とし……対象から自然が抜け落ちるという欠陥をもっていた」と指摘している。さらに、「人と人の連帯」においても、第十二段で「対立的な部分もふくめてどう連帯するのか」という考えがなく、「ヨーロッパ近代が生みだした理念を他者に押しつける連帯でしかなかった」と述べている。

〔問2〕 前の第五・六段で述べた「山村の動物被害」について、筆者は第七段で、「動物たちが人間という侵略者から自然の世界を奪い返しはじめたともみることでもでき」、やがて山は「安定した自然を形成していく」と推測している。動物による被害は、第八段以降で述べる「自然と連帯する」ことについて考えさせられる事例であり、「自然が侵略された大地を人間から奪い返し」、安定した自然を形成しようとする現象とみることもできるのである。

〔問3〕 第十二段には、「近代・現代的な連帯の負の側面」についての筆者の考えが述べられている。これに対して、第十三段では、「資本主義も市民社会や国民国家も成立していない時代」に人々がどう対応してきたかという観点を示して論を展開し、次段落以降でこの問題に対する考え方を示している。

〔問4〕 自然と人間の間には「共存、互惠、対立」という三つの関係があり、本来、対立する関係にある者どうしが共に生きることが困難である。しかし、「そのいずれもが自然と人間の本質」であり、自然と人が共に存在すること自体に「矛盾が内在している」ので、両者が共に生きるには折り合いをつける必要があるのだ。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

〔問1〕 筆者は、直後に「ここには……〈定子自身〉がいる」と述べ、『枕草子』の冒頭の一節の特徴について具体的に説明したあと、最後の段落で「これこそが定子という人の文化だった」と述べている。中宮定子は清少納言らに「ありきたりではなく、非凡なものを。右にならえではなく、自分の感覚で工夫して」と説いてきたが、『枕草子』の冒頭にはそうした中宮定子の文化的志向が表れているというのである。中宮定子は自分の教えが実践されていると知って胸を打たれるだろうと筆者は推測している。

漢字書き取りのポイント

(1) 射

× 矢

× 身 身 身

× 夫 夫

× 六

(2) 鉄

× 点のエアの延長線上にない

(3) 織

(4) 比

× 比 比 比

× 率

(5) 演

× 厂

× 劇

〔問2〕 主語は「くが」「くは」という形のほか、「くも」「くこそ」などの形の場合もある。ここでは、「人も」が主語、「いるかも／しれない」が述部。

〔問3〕 「春」の特徴を問われた時、普通は「春は桜」「春は鶯」など、「春を代表する『物』で答える」はずだが、『枕草子』の冒頭の一文には「春は、あけぼの」と書かれている。「あけぼの」は「明け方」の意味で、時間帯を表す言葉である。

〔問4〕 雅びの手本である『古今和歌集』には桜を詠んだ歌が多く入っているのに対して、『枕草子』の「春は」には「春の要素が登場しない」。これは一見、雅びの世界から外れているように思えるが、「そうではない」と筆者は述べている。『古今和歌集』には「春」と「朝」の取り合わせが何度も記され、「春の朝」に花を詠むのは雅びの典型例である。『枕草子』の「春は」の一節は、『古今和歌集』で示された「春」「朝」「花」を取り合わせるという雅びの典型から、あえて「花」を抜くことで、「紋切り型の発想」ではない新しい雅びの形を示したのである。

〔問5〕 古語の「あやし」は、「異常である。変だ。妙だ。」などの意味を表す。ここでは、宮中を退出して里(自宅)にいる間、狂おしいほどにしきりと中宮定子のことが思い出されてくるという清少納言の心情を表している。

第5回(1月)
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「人と人との連帯について」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験や見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にしながら自分の意見をまとめる。

作文採点基準(都立入試の「部分点の基準」に沿っています。)

- ① 字数：百四十一字以上は減点なし。百四十文字～百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上のものには得点を与えない。

段落の頭は一字空ける。
必ず守ること！

う	そ	手	し	ら	て	人	外	①
ま	れ	と	ず	い	し	と	学	私
く	で	は	つ	、	ま	意	習	に
関	も	な	協	互	い	見	で	は
係	諦	か	力	い	の	が	そ	同
を	め	な	で	の	意	対	の	じ
築	ず	か	き	見	し	立	人	ク
い	に	協	る	を	た	し	と	ラ
て	工	力	よ	す	。③	て	同	ス
い	夫	し	う	り	そ	、	じ	に
く	し	あ	に	合	こ	班	班	苦
べ	、	う	な	わ	で	活	に	手
き	意	こ	っ	せ	友	動	な	な
だ	見	と	て	る	人	に	っ	人
と	を	が	い	こ	に	支	た	が
思	す	で	き	と	間	障	と	い
い	り	き	ま	で	入	を	き	ま
ま	合	ま	し	、	っ	きた	、	す
す	わ	せ	た	少	て	た	そ	。②
。	せ	ん	。	校	も	し	の	

200

100

20

こういう場合、
「や・や」は
改行せず、
行の末尾に入れる。

〈体験(見聞)・意見の中心をしぼる〉

「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件で作文を書く場合、字数も二百字と少ないので、「体験や見聞」「意見」はそれぞれ一つにしぼる。「体験や見聞」をいくつも述べると、その分「意見」を述べるスペースが減り、自分の考えが伝わりにくくなる。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験や見聞↓意見」の形か、「意見↓体験や見聞」の形のどちらかがよい。(右の例は前者。)いずれにせよ、「体験や見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

② 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〈内容〉：「自分の意見、主張」がある。(4点)／「筆者の主張」を踏まえている。(3点)／「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

③ 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

〈内容〉：本文の抜き出しや要約。(10点減点)／論旨に一貫性がない。(2点減点)
〈表記〉：句読点の誤り・誤字・脱字・衍字(えんじ)の一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)／最後の一文が途中で終了。(1点減点)
〈言葉の特徴やきまり〉：不適切な箇所が一つある。(1点減点)二つ以上ある。(2点減点)

〈書き出しを決める〉

「体験・見聞↓意見」の形の場合は、まず、右の例のように「体験・見聞」を簡潔に書く(①～③)。そして、その「体験・見聞」についての「意見」を書く(④・⑤)。右の作文のように、「諦めずに工夫し、意見をすり合わせ、うまく関係を築いていくべきだと思えます」という意見につながる体験・見聞を述べると、筋の通った文になる。「意見↓体験・見聞」の形の場合は、「意見」を簡潔に書き、その意見の正しさを裏付ける「体験・見聞」を具体的に述べる。